

関東信越税理士会熊谷支部長賞

わたしたちの税金

深谷市立幡羅中学校 三年 緒形 沙樹

『税金って・・・』この先に続く言葉は人それぞれだろう。私の場合は『税金って何だろう』だ。さすがに中学三年生ともなれば税金についての勉強をする。税金を納めることは国民の義務だとも知っている。その上で、そう思うのだ。きっとそれは私が実際に税金を納めていないからだろう。消費税でさえ、自分のお金で払っているわけではない。親の働いたお金なのだから。

しかしそう遠くない未来、自分が働いたお金で税金を納めるようになる日がくる。そのときになってはじめて、税金というものが身近なものになり、もっと大きな意味で理解できるようになるだろう。だから今、私がすべきなのは、税金というものに関心をもつことだ。

三世紀ごろ、卑弥呼によって治められていた邪馬台国ではすでに租という税があったらしい。それからの時代も呼び方は異なっているが税は存在していた。社会で習った歴史の中では、税は農民をはじめとする人々をただ苦しめるだけの重い制度にしか感じられなかった。税金によって満たされていたのは、ほんの一部の人間でしかなかったからだ。それでは何の意味もない。

しかし人は失敗から学ぶことのできる生物だ。現代は違う。税金はきちんと人々のために役立てられている。たとえば、私はよく図書館を利用する。様々なジャンルの本と出会える快適な空間だ。しかしその空間はひとりで作り出すこともできなければ管理することもできない。そこで必要なものが税金によって補われる。税金が形を変えて支えているのだ。この様にひとりではできないけれども必要なことが世の中には数多くある。それらをみんなが税金として少しずつ負担することによって形になる。税金とは、みんなが幸せで豊かな生活を送るために必要不可欠のものなのだ。

前にもかいたとおり、私も近い将来、税金を納めるようになるだろう。そして一人前の社会人として認められ、国や地域のために貢献できるようになる。両親をはじめとする、たくさんの大人に支えられすぎた時間を、自分も与えられるようになりたい。